



水野 博子
Hiroko Mizuno
文学部 准教授
西洋史学専攻
オーストリアを中心とする
ヨーロッパ近現代史

Profile

2000年2月
オーストリア・グラーツ大学精神科学部博士課程(歴史学)修了(Dr.phil.)
2001年4月~2014年3月
大阪大学言語文化部・大学院言語文化研究科勤務
2014年4月~現職

主な業績
『ハプスブルク史研究入門』(昭和堂、2013年)(大津留厚・河野淳・岩崎周一との共編著) / 『教養のための現代史入門』(ミネルヴァ書房、2015年)(小澤卓也・田中聡との共編著)など。

所属学会
歴史学研究会、現代史研究会など。

青いウィーン

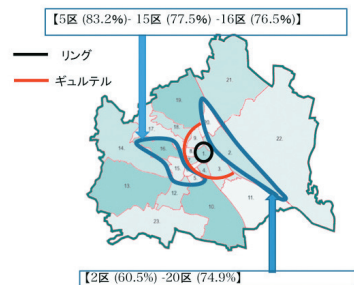
ウィーンという都市について、どのようなイメージをお持ちでしょうか。それ自体が独自の州を形成し、オーストリアの首都としても栄える同市は、二〇一五年現在で人口約一八〇万人、市域面積およそ四一四km²を擁します。帝政期以来の歴史的遺産も多く、華やかでメトロポリタナな印象を与える中欧の都市ですが、その歴史の裏側を覗いてみると、様々な「横顔」がみえてきます。ここでは、私が最近取り組み始めた研究テーマの一つ、「青いウィーン」について、同市の歴史を振り返りながらご紹介いたします。

積ともに拡大し、特に一八六〇年代に市壁の撤去とその代わりにリング通り(以下、リング)が整備され始めてからは近代都市と呼ぶにふさわしい発展を遂げました(写真1)。一九世紀末にはこのリングを中心に、瀟洒なブルジョワ文化が開花しました。当時の市政を担っていたカトリック保守勢力の政治潮流を色に例えて「黒いウィーン」と呼ばれます。

いう二つの環状道路を中心に拡大、発展したといえます。そのウィーンが、近代以来の基本的な構造を残しつつも、一九九〇年代以降、新自由主義的な構造転換を経験し、急速に変化しています。そこで私は、二〇世紀末前後のウィーンを、(新)自由主義的潮流の色に因んで「青いウィーン」と呼んでみようと思うのです(地図を参照)。



写真1 今日のリング通り



地図 「青いウィーン」の空間的構造



写真2 赤いウィーンの特徴カール・マルクス・ホーフ



写真3 ウィーン中央駅

ウィーンでも労働市場の再編が起きていることを意味します。試みに、ドイツ語を母語としない小学校児童の割合を調べてみると、最も高い区ではこの割合は実に八三%に上ります(ウィーン全体の平均は約五〇%)。実際、これらの地区を歩いてみるとスラヴ語系の言葉に時々ドイツ語が混じるような会話を頻繁に耳にします。私はこれまで、「オーストリア国民」の問題を深く検討してきましたが、その際にナチズムやドイツ語などの共通性を持つことから隣国ドイツとの関係を意識していました。しかし、今やそこに暮らす人々は実に多様で、特にウィーンは刻一刻と大きな変貌を遂げている事実を目の当たりにして、「ウィーン人」、「オーストリア国民」など一言では言えないのではないかと思うようになりました。

同駅はウィーンと「貧しい東・南部」とを結び列車の発着駅だったところで、どこか寂しげな印象すら受けました。七〇年代〜八〇年代の南駅は、毎日曜日にはユーゴスラヴィアなどから来ていた出稼ぎ労働者が交流する、東の故郷の匂いするスポットでもありました。ところが、昨今の大規模な再開発の結果、南駅は明るく斬新なデザインによって一新され、ウィーン中央駅として生まれ変わりました(写真3)。このように、現代のウィーンでは、貧しい社会層と富裕な社会層とを分断する空間的なセグレーション(棲み分け)が起きていると考えられます。